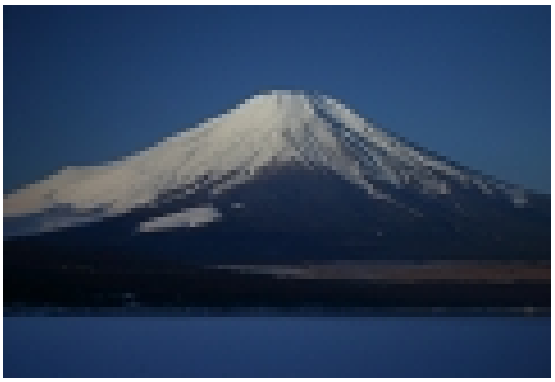
4　田子の浦に　うち出でてみれば　白妙の　富士の高嶺に　雪は降りつつ

山部赤人



富士山

〈声に出してよんでみよう〉

タゴノウラニ　ウチイデテミレバ

シロタエノ　フジノタカネニ　ユキワフリツツ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]　助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊初句の「田子の浦に」の音の数を数えてみましょう。「タ・ゴ・ノ・ウ・ラ・ニ」。６音ですね。第２句の「うち出でてみれば」はどうでしょう。「ウ・チ・イ・デ・テ・ミ・レ・バ」。８音です。ともに、「５・７・５・７・７」の定型からはみ出してしまっていますね。このような場合を「**字余り**」と言います。反対に、足りない場合は「**字足らず**」と言います。しかし、どちらの場合も音読する時はあくまでも「５・７・５・７・７」のリズムに乗せて読みます。このため、字余りの歌には切迫感が、字足らずの歌には空白感が、生まれるという効果があります。

〈どんな意味だろう〉

田子の浦に出てみると、真っ白な富士の高嶺に、雪は降り続いて…！

＊「田子の浦」は、静岡県の地名です[2]。「うち」は、動詞の意味を強めたり調子を整えたりする接頭辞。「出でて」は、現代語では「出て」になります。「白妙」は、白い布。「白妙の」は、真っ白な、という意味を表します。

＊「つつ」は、継続・進行を表す接続助詞です。これは、普通は文末には用いられません。このため、和歌の最後を「つつ」で止める「つつ止め」は、あとにまだ何かが続くような感じを与え、**余情・余韻**を生み出す効果があります。

＊この歌には、文法的な文の切れ目はありません。したがって、句切れなしの歌ということになります。では、意味的なまとまりはどうでしょう。現代語訳を参考にしながら考えてみてください。「５・７」「５・７・７」となりますね。つまり、これは「５・７」のリズムを基本とする「**五七調**」の歌であるということになります。五七調は、現存する最古の歌集である**『万葉集』**（奈良時代・８世紀頃成立）の基本のリズムです。[3]

〈解説〉

富士山は標高 3776 メートル、言うまでもなく日本の最高峰です。また、その姿の美しさもあって、多くの人に、心のふるさととして愛され続けています。皆さんの住んでいる町やその近くにも、富士見町・富士見が丘・富士見台、などという地名はありませんか？　また、地方では、その土地で一番高くて美しい山を、「津軽富士」（青森県津軽の岩木山）・「越後富士」（新潟県の妙高山）などというように呼んでいます。新年、最初に見る夢である「初夢」でも、縁起の良い順番は、「一富士・二鷹・三茄子」であると言われています。



一富士二鷹三茄子



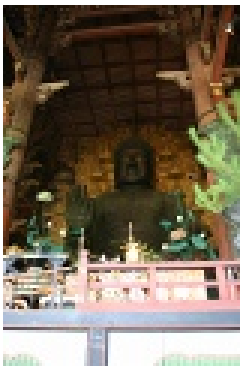
七福神

「百人一首」の中で、富士山を詠んだ赤人のこの歌も、有名で、人気のある歌の一つです。2006 年 7 月、郵政省から「百人一首」の切手が発売されましたが、この歌もその中に選ばれています。

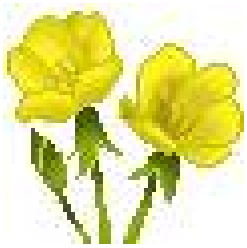
http://www.post.japanpost.jp/kitte_hagaki/stamp/tokusyu/2006/h180721_t.html

この歌のもととなる歌が詠まれた 8 世紀には、都は奈良にありました。静岡と山梨にまたがる遠方の富士山を、実際に目にした都の人は、それほど多くはなかったでしょう。また、奈良の地は温暖で、雪はあまり多くありません。冬、山頂に真っ白な雪をかぶった富士の雄大な姿は、見る者を畏敬と感動で圧倒したに違いありません。赤人のこの歌は、そのような富士の魅力を歌いあげたものとして、高く評価されています。

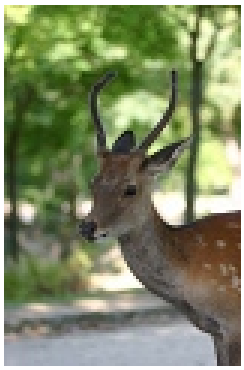
この歌の他にも、富士山を題材とする有名な作品は枚挙にいとまがありません。例えば、江戸時代の葛飾北斎は連作版画『富嶽三十六景』（1831 年頃）を描きました。「嶽」とは、高くて大きな山の意ですから、「富嶽」とは富士山のことです。この作品は、当初はその名の通り 36 点で完結するはずでしたが、人気を博したため 10 点が追加され、46 点となったと言います。また、昭和期の作家・太宰治は、小説『富嶽三十六景』（1939 年）の一節に、**「富士には月見草がよく似合う」**という有名な言葉を記しています。



大仏



月見草



鹿

皆さんも、財布の中から 1000 円札を取り出し、裏返してみてください。ほら、そこにも富士山が描かれていますね！

〈作者と出典〉

作者の**山部赤人**は、奈良時代、８世紀頃の人。宮廷に仕えた下級役人であったらしいのですが、生没年も経歴も不明です。天皇の行幸のお供をしてその土地の風景や自然を詠んだ歌が、現存する最古の歌集である**『万葉集』**（８世紀頃成立）に多く収められており、柿本人麻呂（→「３あしひきの」）と並ぶ、万葉の二大歌聖として尊敬されています。

さて、「百人一首」に収められた、この「田子の浦に」の歌は、『新古今和歌集』（13世紀頃成立）を出典としています。

『万葉集』には、次のような形で載っています。

田子の浦ゆ　うち出でてみれば　真白にぞ　富士の高嶺に　雪は降りける

（田子の浦を通って眺望の開けた所に出てみると、真っ白に、富士の高嶺に雪は降っていることだ！）

「ゆ」は、奈良時代に用いられた助詞で、移動・経過の場所を表します。百人一首・新古今の「白妙の」は、白い布の比喩から生まれた表現ですが、万葉では「真白にぞ」と、より**直接的**な表現となっています。また、百人一首・新古今の「雪は降りつつ」は、田子の浦から富士に雪が降り続いているさまは実際には見えるはずがなく、**観念的・幻想的**な詠みぶりとなっていますが、万葉の「雪は降りける」は、雪が降っていることに気づいた感動・驚きを**素直**に詠んでいます。万葉と新古今の作風の違いが、よくあらわれている一首です。

古典の時代は、現代のような活字本ではなく、記憶・口承・手書きによる筆写などの手段で、文学作品は伝えられていったのでした。ですから、当然、伝承による差異が生じたのです。また、現代のような著作権の概念もありませんでしたから、古くから伝わる作品が伝承の段階でより良い（と思われる）方向に改作される、ということも、普通に行われていたようです。

「田子の浦ゆ」と「田子の浦に」、２つの歌の違いを、あなたはどのように受けとめますか？　どちらの方が好きですか？　皆で話し合ってみると、面白いでしょう。

最後に、１つ、クイズです。次の漢字の行列は、一体何と読むのでしょう？

田兒之浦從　打出而見者　眞白衣　不盡能高嶺尓　雪波零家留

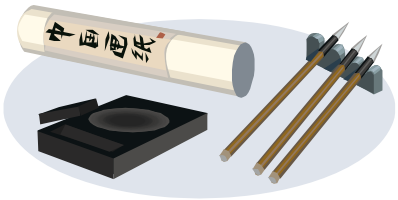
わかりましたか？　答えは、『万葉集』の「田子の浦ゆ」の歌です。

『万葉集』は、奈良時代・８世紀頃の成立です。このころ、かな はまだなく[4]、文字は中国渡来の漢字しかありませんでした。そこで、漢字をある時は表意文字として、またある時は表音文字として、自在に操り、日本語による歌を表記しようとしたわけです。

このような表記法を、**「万葉仮名」**と言います。素晴しい工夫・発明ですね！



酒



書道

---

[1] ハ行の子音は、８世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて 11 世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、17 世紀頃と推定されています。

[2]「田子の浦」という地名は、現在は静岡県富士市の海岸ですが、当時はそれより西の、由比や蒲原あたりであったと言います。

[3]「五七調」に対し、「７・５」を基本とするリズムを「**七五調**」と言います。七五調は、『**古今和歌集**』（平安時代前期・905 年頃成立）の時代以降現代に至るまで、日本語の韻文の一般的なリズムとなっています。

[4] かなの成立は、平安時代初期、９世紀頃と推定されています。